

兵庫県養父郡関宮町

外野野遺跡

一般農道整備事業（過疎基幹）関宮西部地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

平成13年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県養父郡関宮町

と の の
外 野 野 遺 跡

一般農道整備事業（過疎基幹）関宮西部地区に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 II

平成13年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　言

1. 本書は、養父郡関宮町外野に所在する外野野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、兵庫県和田山農林事務所が計画する一般農道整備事業(過疎基幹)関宮西部地区に関連するもので、兵庫県和田山農林事務所の委託を受けて、平成12年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理は、平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
4. 遺物の写真撮影は、鴨谷口フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は平松ゆりらの補助を得て長濱誠司が行った。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および魚住分館(明石市魚住町清水)で保管している。
7. 現地調査および整理作業の際には、下記の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して感謝いたします。
(敬称略・順不同)

関宮町教育委員会・山根実生子（養父郡町村会）・西谷弘之（別宮区長）・岡田憲一（奈良大学大学院）

凡　例

1. 本書で示す標高値は、東京湾平均海水準（T.P.）を基とする。方位は座標北を示し、平面図に示した座標値は、平面直角座標V系原点からの距離である。（単位はkm）。
2. 遺物には通し番号を付けている。ただし石器には数字の前にSを付けて、土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・図版・写真図版ともに統一している。
3. 土層等の色調については、『新版 標準土色帖』1997年版を使用した。
4. 本書で使用した地図は以下のとおりである。

第 図 国土地理院発行 1／50,000地形図 「村岡」 平成6年8月発行
「大屋市場」 平成 8年11月発行
「出石」 平成 7年8月発行
「但馬竹田」 平成 8年 3月発行

本文目次

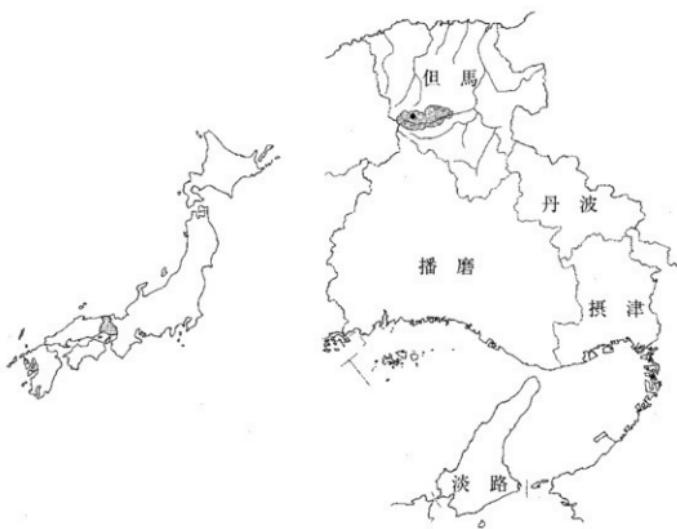
第1章 調査の経過	(長濱誠司)	1
第1節 調査にいたる経緯		1
第2節 発掘調査の経緯		1
第3節 整理作業の経緯		3
第2章 遺跡をとりまく環境		4
第1節 地理的環境	(田中弘樹)	4
第2節 歴史的環境	(上田健太郎)	4
第3章 調査の結果			
第1節 調査の概要	(長濱)	8
1. 調査区の位置		
2. 調査区の設定		
3. 調査の方法		
4. 調査区の概要		
5. 調査区の土層		
第2節 遺構			
1. 概要	(長濱)	11
2. 土坑	(長濱・上田)	11
3. その他の遺構	(長濱)	15
第3節 遺物			
1. 土器	(長濱)	15
2. 石器	(上田)	16
第4章 まとめ	(長濱・上田)	19

挿図目次

第1図	遺跡の位置	iii
第2図	調査区の位置	2
第3図	周辺の遺跡	6
第4図	調査区地区割図	8
第5図	調査区全体図	9
第6図	調査区南壁断面図	10
第7図	土坑（1）	12
第8図	土坑（2）	14
第9図	出土土器	15
第10図	出土石器（1）	17
第11図	出土石器（2）	18

写真図版目次

図版1	遺跡の遠景 遺跡の遠景
図版2	調査区全景 調査区西半部
図版3	SK 1～5 周辺 SK 2 SK 2断面 SK 5断面
図版4	SK11周辺 SK11 SK11石皿出土状況
図版5	SK12 SK13 調査区東半部南壁断面 調査区西半部南壁断面
図版6	縄文時代早期の土器（表面） 縄文時代早期の土器（裏面）
図版7	縄文時代中期他の土器（表面） 縄文時代中期他の土器（裏面）
図版8	出土石器



第1図 遺跡の位置

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

兵庫県養父郡閑宮町の鉢伏高原一帯は、夏は野外学習、冬はスキー場として近畿でも広く知られた観光地である。また、この地は、兵庫県内で縄文時代の遺跡が集中する地域としても知られている。これは1960年代より農地開墾・観光地と高原が変貌していく中、精力的に分布調査を行った地元の研究者である高松龍暉氏の業績によるところが大きい。今回調査した外野野遺跡、平成11年度に調査した外野柳遺跡についても高松氏の踏査により発見されたものである。

平成4年度、この鉢伏高原に所在する閑宮町別宮と同町丹戸を結ぶ、閑宮西部地区退耕基幹農道整備事業が、兵庫県和田山土地改良事務所によって計画された。この事業用地内には複数の遺物散布地が存在するため、兵庫県和田山土地改良事務所は閑宮町教育委員会に対し、工事に先立つ埋蔵文化財の調査を依頼した。同町教育委員会は、平成5年度に確認調査を実施し、外野波豆遺跡、外野柳遺跡、外野野遺跡で遺構・遺物が確認された。外野波豆遺跡、外野柳遺跡については、平成11年度に遺跡の範囲に工事が及ぶため、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。平成12年度、工事が外野野遺跡の範囲に及ぶことになったため、本発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経緯

1. 確認調査

平成5年5月18日～6月15日

調査主体 閑宮町教育委員会

調査担当 养父郡町村会 山根寅生子

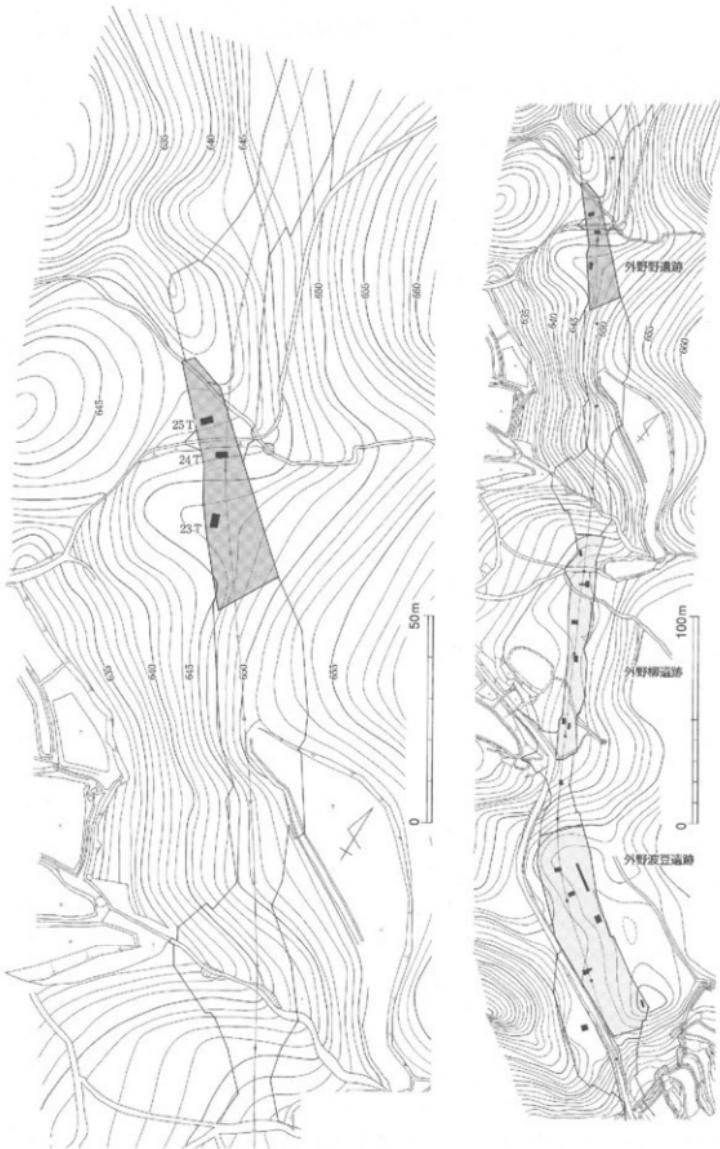
調査面積 13.5m²

「事前の分布調査を行ったが、散布地周辺の現況が雑木林か、杉・檜が植林されており、遺物を採集することはまったく不可能な状況であった。そこで、分布調査を補い、遺跡の有無、及びその範囲を確認するために、確認調査を実施することにした。」事業対象地内には合計25か所の確認溝を設定し、その調査総面積は114m²である。今回本発掘調査を実施した箇所は、確認調査実施範囲の西端にある。外野野遺跡の調査は、「1.5×3mの確認溝を、南に張り出した小尾根に1ヶ所、尾根から谷に至る緩傾斜地に1ヶ所と谷上部の平坦地に1ヶ所設定し」行った。「調査の結果、25Tでピットを検出したほか、24Tでは火を受けた痕跡のある縄の出土をみた。また、23～25Tで縄文土器や磨石等が出土した。」(「内は、確認調査の実績報告書より抜粋。)

2. 全面調査（調査番号2000233）

今回の調査対象である外野野遺跡は、高松龍暉氏が遺物を採集した水田（本発掘調査時は休耕し、荒蕪地）の西側に位置する。前述した確認調査の結果、ピットを検出し、遺物包含層から縄文土器、石器が出土したことから、事業対象範囲が外野野遺跡の一部であり、本発掘調査が必要と判断された。その後、兵庫県和田山土地改良事務所と協議を行い、平成12年度に当該地の本発掘調査を実施した。

本発掘調査は、兵庫県和田山土地改良事務所からの依頼（平成12年6月15日付 和土改403号）に基づ



第2図 調査区の位置

くものである。調査にあたっては、兵庫県教育委員会が、発掘調査については株式会社島正建設と、航空測量については株式会社ジエクトとそれぞれ委託契約を締結して実施した。

調査体制は以下のとおりである。

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

副所長 吉田 昇（事務担当）

泉 吉嘉（技術担当）

大村敬通（調査担当）

総務課 課長 森 俊雄

企画調整班付 稲田 敏

企画調整班 調査専門員 山本三郎／主査 高瀬一嘉

調査第3班 調査専門員 小川良太

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第3班 主査 山上雅弘

主任 長濱誠司

技術職員 上田健太郎

研修生 田中弘樹（美方郡温泉町教育委員会職員）

現場事務員 山下恵美

第3節 整理作業の経緯

兵庫県と田山農林事務所との契約で、発掘調査から報告書刊行までを単年度で実施した。

整理作業は、発掘調査時に、現地の監督員詰所で出土遺物の洗浄作業から開始し、ネーミングまでを行った。本格的な整理作業は、発掘調査終了後、出土遺物を埋蔵文化財調査事務所に搬入し、接合から調査報告書刊行までの作業を行った。

土器へのネーミングは遺跡調査番号のあとに通し番号を付し、内容はネーミング台帳に記載している。

土器は、接合の後、実測を行った。実測点数は、土器11点、石器10点である。土器については必要に応じて、内外面の拓本を行った。

遺物の写真撮影を実施、実測図などのトレース・レイアウト作業を行い、報告書刊行に至った。

整理作業の体制は以下のとおりである。

整理フロア担当 整理普及班 主任 深江英恵

整理担当職員 調査第3班 主査 山上雅弘

主任 長濱誠司

技術職員 上田健太郎

研修生 田中弘樹（美方郡温泉町教育委員会職員）

整理担当嘱託員 主任技術員 池田悦子 古谷章子／企画技術員 平松ゆり 香川フジ子

図化技術員 島田留里 河上智晴 西岡敬子／日々雇用職員 高野佐智子

第2章 遺跡を取り巻く環境

第1節 地理的環境

外野遺跡は、兵庫県養父郡閑宮町外野地内に所存する。閑宮町は兵庫県北部の但馬地方北西部に属し、総面積95.59ha、町域の87%が山林原野の町である。中国山地の東麓に位置し、北は妙美山（標高1,139m）、南は氷ノ山（1,510m）、西は鉢伏山（1,221m）など1,000mを超える山々に囲まれている。山地にはミズナラやアカマツやブナなどの樹木、スキ・チシマザサ・レンゲツツジなどの花草が植生し、氷ノ山・鉢伏山・杉ヶ沢高原にかけて氷ノ山後山那岐山国定公園にも指定されている。町の中心は八木川沿いの沖積地にある。八木川は氷ノ山を水源とし、東流して八鹿町で但馬地方の最大河川、円山川に合流する。

閑宮町の地質は中新世に形成された北但層群で構成され、主に鉢伏高原は第三紀の村岡累層に鉢伏火山岩、通称クロボクと言われる黒色土が覆っている。クロボクは尾根筋で数cm～20cm、谷部では50～100cm堆積し、その下層には火山礫を含んだ黄褐色のローム層が堆積する。

気候は典型的な日本海型気候の山陰型であるが、高原は、町の中心と比較して気温が低く、特に雪が多い。12月から3月までは雪に覆われ、地域によって2～3mの積雪があり、冬はスキー場として賑わう。

遺跡は閑宮町西部、鉢伏高原南縁部の梨が原向山の山腹台地、標高約650m付近に立地する。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

但馬地域の中でも閑宮町付近は旧石器の分布が濃厚な一角であり、別宮家野、杉ヶ沢遺跡といった高原地帯の遺跡をはじめ、三宅西谷、吉井円光寺跡といった八木川中流域の遺跡においてもナイフ形石器が採集されている。特に別宮家野遺跡ではナイフ形石器が4点出土しており、いずれも小型化した終末期のものとされる。4点のうちサヌカイト製・チャート製各1点のほかに頁岩製2点が含まれていることは、すでに北陸地方との関連が指摘されており興味深い。

なお、木葉形尖頭器が鉢伏高原遺跡及び養父町森石ヶ堂遺跡で、有舌尖頭器が杉ヶ沢遺跡、三宅早塙遺跡で出土している。帰属時期は判然としないが、石材はサヌカイトの他に頁岩も含まれており、ナイフ形石器と同様のあり方を示す。これらの中には、縄文時代早期から前期初頭の土器と同一の層から出土しているものもあるが、今後出土状況における縄文時代の土器との関連性が問題となろう。

縄文時代

閑宮町に隣接する大屋町の上山高原では、隆起線文土器が採集されている。草創期の資料として但馬地域はもとより京都府福知山市武者ヶ谷遺跡とともに近畿地方でも最古級のものと言えよう。また、別宮家野遺跡で発見されたスマール・ブレイドも草創期段階に属すとされる。

閑宮町付近では早期段階から遺跡が顕著に見られはじめ、前期から中期前葉頃まで半ば断続的でありながらも連續と遺物が認められるものが多い。鉢伏高原遺跡や杉ヶ沢遺跡をはじめ、日高町の神辺遺跡同様その多くが高原上に立地し、標高は400mから800mにも達する。以下当該期の遺跡を概観しよう。

別宮家野遺跡では最も古いタイプとされる押型文土器が出土し、早期初頭の焼窯集石遺構や、平地式住居の可能性を伴うピット群が確認されている。鉢伏高原遺跡では前期前半を中心とするまとまった資料が確認され、当該期の住居跡と考えられる遺構も検出されている。特に块状耳飾は表探資料ではあるが早期末にまでさかのぼる可能性を持ち、当時の日本海沿岸の交流を示すものとして重要な資料である。杉ヶ沢

遺跡では早期末から前期初頭にかけての資料が中心であり、押型文土器は別宮家野例に近い古相を示す。梨ヶ原向山遺跡では早期末の特徴的な土器の一群が認められる。

なお、八木川流域の上向田遺跡では中期初頭のものと思われる住居跡と袋状土坑が確認されている。

また、近年外野波豆遺跡に接する外野波豆遺跡、外野柳遺跡が調査された。外野波豆遺跡では28基の土坑が検出され、埋土などから前期末から中期初頭を中心とする土器が出土し、北陸系新保式の個体が含まれている。土坑は埋土の状況から貯蔵穴及び窓穴の可能性が指摘されている。外野柳遺跡では、早期の押型文土器が焼穢集石遺構の周辺から出土した。

中期以降では、小路頃オノ木遺跡で中期末から後期初頭の住居跡及び後期前葉の土坑が確認されており、梨ヶ原遺跡においても後期初頭の土器が出土している。後期中頃から末にかけての土器は耳堂遺跡、八鹿町国木とが山古墳群、上山高原、建屋川流域の大屋町森右ヶ堂、野谷、宮垣の各遺跡で確認されている。

晩期の遺物の出土例は極めて少なく、耳堂遺跡で刻目突文土器が、建屋川流域の大屋町野外遺跡で滋賀里Ⅲ～IV式土器及び石器、磨製石斧が出土しているのみである。

このように縄文時代の遺跡が早期から中期へと連続と続き、低地に降りつつも後期へと存続していく中で、すでに指摘されているように晩期の遺跡に乏しいことと、前期末に全国的に遺跡数が激減する状況下で外野波豆遺跡において大歳山期の遺物が出土していることは特徴的である。また、窓穴の存在が指摘されながらも外野波豆・外野柳の両遺跡において石器が1点の出土も見ない。近年大下明氏は当該期集落間の石器組成をもとに、石器のあり方と狩猟活動が活発化する冬季の居住域の関連性を指摘し、夏季に高原地帯に居住し季節的移動が行われた可能性を想定している。

弥生時代

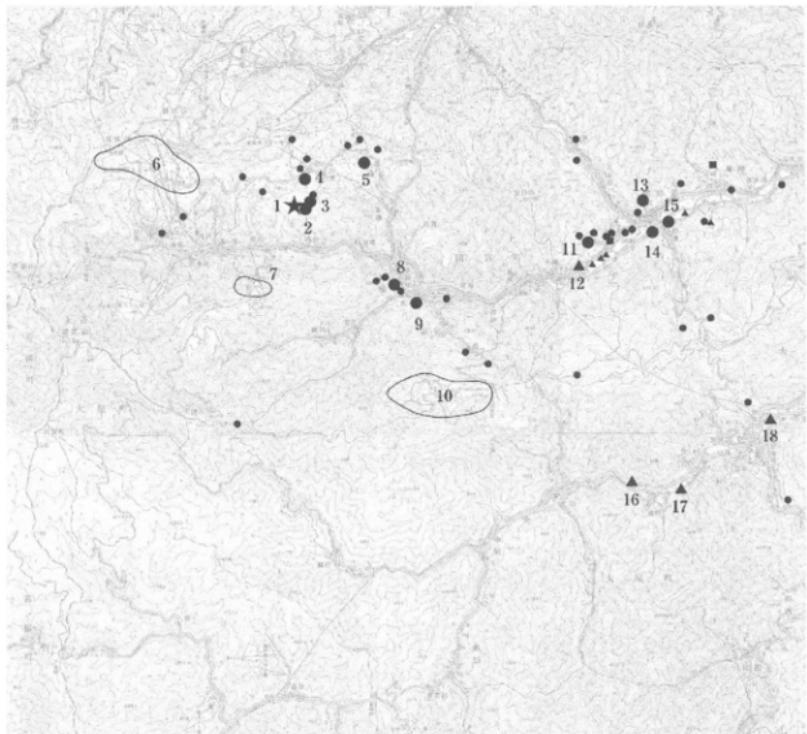
高原地帯における弥生時代の生活痕跡の発見例は、近年外野波豆遺跡において前期土器が2点出土しているのみである。この資料は漆及びベンガラが塗布された脚台付きの土器であり、前期中段階とされる。前期土器は付近では吉井門口遺跡や八鹿町東家ノ上遺跡、大屋町國梨遺跡で新段階のものが確認されているほか、養父町森字犬野採集例が知られる程度で非常に珍しく、特に外野波豆例は高原地帯の縄文晩期からの生業の変遷を探る上で画期的な一例となろう。

閔官町域では八木川流域の河岸段丘上に三宅前川向遺跡、三宅中島遺跡といった遺跡が集中してみられ、淹ノ尻遺跡ではV字溝及び溝状遺構が確認され溝状遺構の底部から田下駄が確認されている。八木川を下流に遡れば、丘陵上に立地する八鹿町東家ノ上遺跡や同町赤尾遺跡で中期初頭の円形住居跡が検出されており、赤尾遺跡では住居跡に前後する時期の溝が斜面をめぐっている。また、東家ノ上遺跡の八木川を挟んで対岸には中期後半の円形馬溝墓をもつ米里遺跡がある。

後期では大屋川水系に比重が傾き、大屋町五反田遺跡で住居跡、溝、袋状土坑が、同町田和遺跡においても後期の住居跡が検出されている。五反田遺跡の袋状土坑の内部は被熱し壁面が硬化していることから土器焼成窯の可能性が指摘され、溝も自然の河川と結合して集落をとりかこむ環濠の機能を果たした可能性が指摘されている。

古墳時代

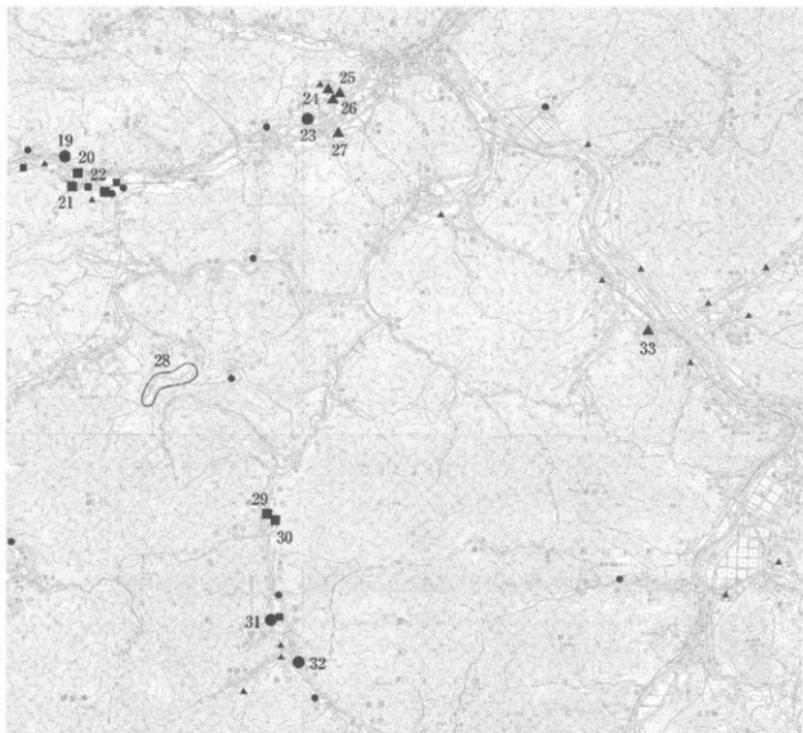
養父郡内で最も遅いものは大屋川流域の大屋町田和古墳である。墳丘は不明であるが、1・2号主体はともに木棺直葬で頭部に赤色顔料が認められ、琴柱形石製品2点をはじめ堅櫛、管玉、刀子、短剣、鉄鎌、針状鉄製品を伴い4世紀後半から5世紀初頭にかけての様相を呈する。それに後出する主要なものでは八木川下流域に流域唯一の前方後円墳八鹿町上山古墳が、中流域に鐵刀と柳葉形鐵鎌を出土した三宅タ



第3図 外野野遺跡の位置と周辺の縄文～弥生時代の遺跡分布図

- 1 外野野遺跡 2 外野柳遺跡 3 外野波豆遺跡 4 別官家野遺跡 5 葛畠中野遺跡 6 鉢伏高原遺跡群
- 7 梨ヶ原遺跡 8 小路須才ノ木遺跡 9 出合赤道遺跡 10 杉ヶ沢遺跡 11 吉井円光寺林遺跡 12 吉井門口遺跡 13 堂山遺跡 14 下向田遺跡 15 上向田遺跡 16 囲梨遺跡 17 五反田遺跡 18 田和遺跡／古墳 19 耳堂遺跡 20 滝ノ尻遺跡 21 三宅西谷遺跡 22 三宅中島遺跡 23 三宅前川向遺跡 24 三宅早砧遺跡 25 国木とが山古墳群 26 箕谷遺跡／古墳 27 東家ノ上遺跡 28 赤尾遺跡 29 米里遺跡 30 上山高原遺跡群 31 大野遺跡 32 茂石ヶ堂遺跡 33 野外遺跡 34 野谷遺跡 35 高瀬遺跡

イコ山古墳が存在する。他に八木川流域に沿って横穴式石室を持つ古墳や箱式石棺墓が分布するが、多くは未調査のため詳細は不明である。今までのところ八木川上流域や高原地帯において古墳は発見されていないが、杉ヶ沢遺跡では前期の木棺墓が1基検出されており、今後の調査に期待がかかる。



参考文献

- 石野博信(編) 1979『縄文時代の兵庫』兵庫考古研究会
- 大下明 1999「Ⅶ付論1. 鉢伏高原遺跡の縄文時代石器資料について」山根実生子(編)『鉢伏高原遺跡』
- 閑宮町埋蔵文化財調査報告7 閑宮町教育委員会
- 瀬戸谷皓 1990「考古学から見た養父町」養父町史編集委員会(編)『養父町史』第一巻 奈父町
- 中村典男(編) 1974『養父郡の埋蔵文化財』南但馬地区農用地開発事業埋蔵文化財分布調査団
- 前田農邦 1982『大屋の遺跡』1 大屋町教育委員会
- 前田農邦 1996「第五章 但馬國」村川行弘(編)『兵庫県の考古学』吉川弘文館
- 村上賢治(編) 2000『外野波豆遺跡・外野柳遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第201号 兵庫県教育委員会
- 山口卓也・高松龍輝 1981「但馬地方における旧石器について」『兵庫考古』第13号 兵庫考古研究会
(紙幅の都合により各調査報告書については削愛した。)

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

1. 調査区の位置

調査区は、高原から南に派生した尾根の南端付近に位置する。調査区の標高は、640~645mである。南側の谷に位置する外野集落からの比高差は約240mあり、北側の高原に位置する別宮集落とはほぼ同じ高さである。

調査区周辺の現況は山林であり、調査区から南側は広葉樹の自然林、北側は植林された杉・檜林となっている。東西両側の斜面は、一部が開墾され、棚田となっている。

2. 調査区の設定

調査区は、農道工事に先立って設置された道路センター杭及び境界杭をもとに任意の基準線を出し、西端を基点に設定した。調査区は長さ59m、最大幅15mを割り、その面積は636m²である。

この調査区設定をもとに地区割りを行った。基準線を境として南・北の2地区に分けた。次に約10mの幅で基準線に直交する線を設定し、調査区西端を基点に1区とし、東端の6区まで分けた。表記は「1区北」のようにし、包含層の遺物取り上げなどに用いた。

3. 調査の方法

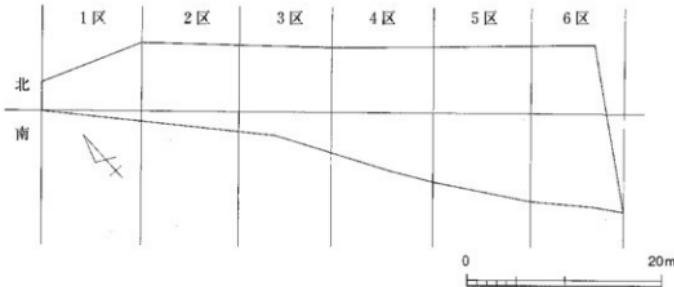
調査に際しては、農道の本体工事範囲から調査対象地までの仮設道の設営から開始した。これと平行して、調査対象地内の樹木等を伐採・搬出を行った。

調査区を設定後、機械により遺物包含層までを掘削し、以下人力により遺構面までの掘り下げを行った。掘り下げ後、遺構面の精査、遺構の振り下げを実施した。

遺跡の記録にあたっては、足場およびヘリコプターから写真撮影を行った。測量は、個別の遺構を職員が実測した他は、空中写真測量を実施した。

4. 調査区の概要

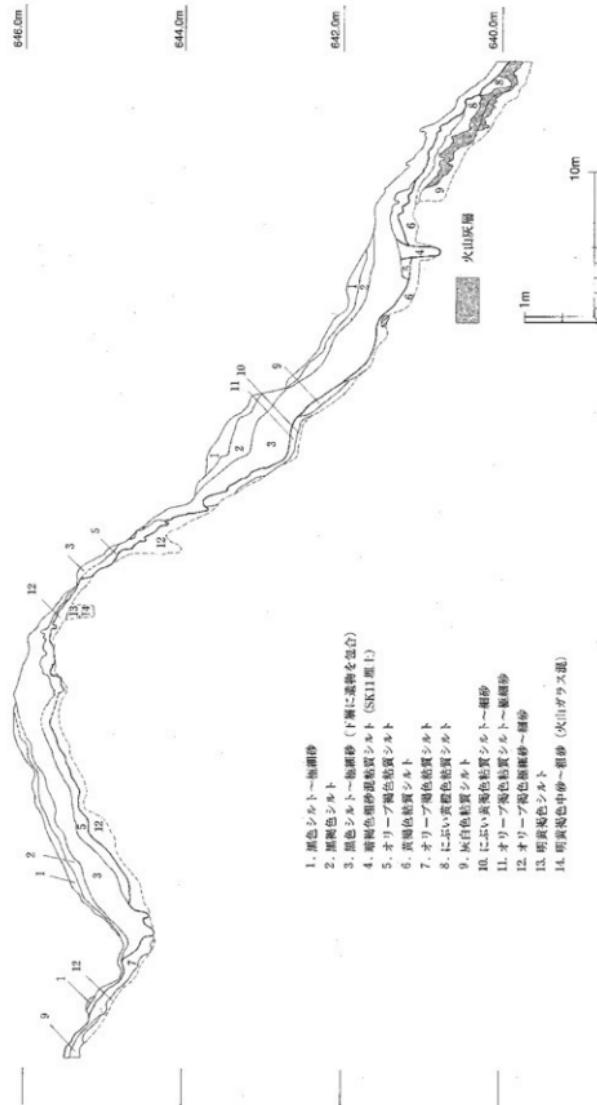
調査区を大別すると、尾根部分とその両側の斜面からなる。尾根は調査区中央の4区南から5区北に位



第4図 調査区地区割図



第5図 調査区全体図



第6図 調査区南壁断面図

置し、東西方向に延びる。南側の5・6区南は緩斜面となり、調査区南端の小規模な谷地形へと続く。北側は、谷へ向かっての斜面である。斜面は、標高641.2m付近の2区南・北で平坦となる。この部分は、調査区の北東から続く谷の傾斜変換点でもあり、谷から流出した疊が2区南・北区を中心に集中し、ほぼ調査区を横断するように分布する。この疊は、20cmから100cm程度のもので、ローリングし、丸みがある。より谷に近い北半部は50cm以上の疊が密集し、南半部は疊がやや小型で、分布も疎らになる。1区北及び2区北の北端部分は、隣接する沢の侵食により、崖状を呈する。

5. 調査区の土層

調査区の基本的な層序は、①クロボク（第5図1～3層。以下同じ）、②オリーブ褐色粘質シルト（5層）、③地山（6層以降）となる。①層は調査区内で厚い堆積をみせ、表土（1層）もクロボクの土壌化が進んだものである。②層は、調査区全域には存在しないが、断面の観察では、この層の上面が本来の造構面である。ただし造構検出が困難なことから、造構検出作業は、③層直上で行った。また、調査区西端付近の西向き斜面では、8層の下でATと思われる火山灰層を検出した（第5図トーン部分）。火山灰層は、東半部は周囲の層と攪拌された状況であるが、西半部では純粋な堆積をみせる。調査区の他の部分では火山灰層はみられないが、尾根上の14層では、火山ガラスの混入が認められる。

第2節 造構

1. 概要

造構は調査区東端から中央部へ延びる尾根上平坦面と、西半部の平坦面で検出した。また、尾根東側の緩斜面でも疎らながら造構が分布する。尾根上の造構は、調査区南端付近で、東西に並ぶ土坑群を検出した。一部の土坑埋土およびその周辺には少量の炭が散布する。西半部の平坦面では土坑とピットを検出した。

2. 土坑（第7・8図）

SK1

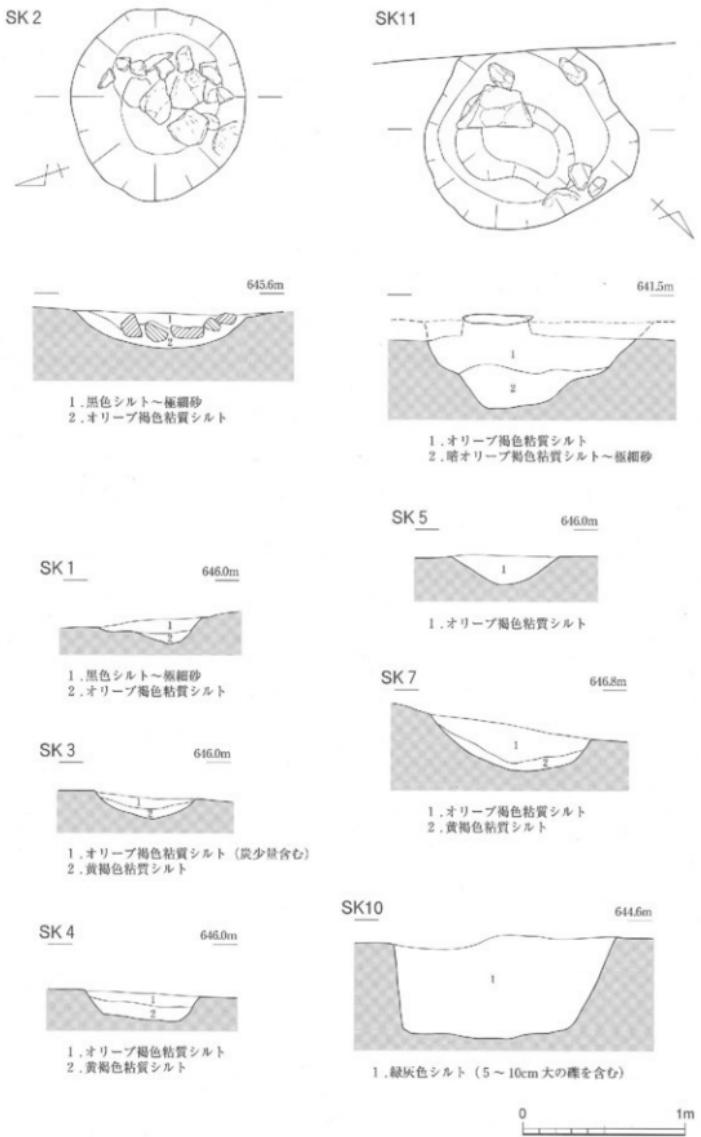
4区南の尾根上平坦面で検出した。土坑群の中で調査区縦に近い西側に位置する。クロボクを埋土とし、平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈する。長径120cm、短径64cm、深さ15cmを測る。底部北よりに地山の疊が露頭する。遺物は出土していない。

SK2

4区南の尾根上平坦面で検出した。土坑群の中にあり、SK1・3に挟まれる。平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、長径118cm、短径107cm、深さ20cmを測る。クロボクを埋土とし、少量の炭が混じる。底付近に10～25cm程度の疊15個が集中する。疊は調査区周辺にあるものであり、外部より搬入したものや、加工や火熱をうけた痕跡があるものは認められない。遺物は出土していない。

SK3

4区南の尾根上平坦面で検出した。土坑群の中にあり、SK3・5に挟まれる。平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、長径108cm、短径62cm、深さ12cmを測る。オリーブ褐色粘質シルトを埋土とする。



第7図 土杭(1)

遺物は出土していない。

SK 4

4区南の尾根上平坦面で検出した。土坑群の中にあり、SK 5の西に位置する。平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、長径106cm、短径70cm、深さ16cmを測る。オリーブ褐色粘質シルトと黄褐色粘質シルトを埋土とする。遺物は出土していない。

SK 5

4区南の尾根上平坦面で検出した。土坑群の中の東端に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径33cm、深さ9cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK 7

5区南の尾根上平坦面で検出した。平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、長径120cm、短径100cm、深さ26cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK 10

4区南、尾根北側斜面で検出した。平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈し、長径200cm、短径135cm、深さ66cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK 11

3区の南壁側に位置し、一部は調査区外に及んでいる。長径125cm、短径115cm、深さ43cmで、中央部分のみ2段掘り状にやや深めに掘られており、土層堆積は2層に分かれる。遺構検出面において石皿を出土したほか、1層中に直径15cm程度の甌が5個含まれていた。

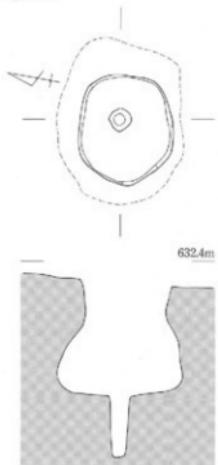
SK 12

5区北の東側に位置する。長径75cm、短径64cm、深さ75cmを測る。平面形態は隅丸の五角形で断面形態は肩部内側に張り出す袋状を呈す。なお、底部付近的最大径部分では長径113cm、短径85cmを測り、平面プランに比べてやや丸みを帯びた形となる。埋土はクロボクが1層堆積している。遺構底部の中央やや北よりに杭穴を持ち、直径は15cm、深さは42cmである。

SK 13

SK12の東南側にあり、6区南の東側すなわち調査区東壁付近に位置する。長径97cm、短径80cm、深さ89cmを測る。平面形態は楕円形で断面形態は部分的に肩部内側に張り出し、SK12同様袋状を呈している。底部付近の最大径部分は平面プランの形状とさほど変わらず、長径110cm、短径90cmと規模は若干大きくなる。埋土はクロボクが1層堆積している。遺構底部の中央やや東よりに杭穴を持ち、直径は11cm、深さは19cmである。また、南東方向には円形の浅い土坑を伴うが、SK13を切ると思われる。

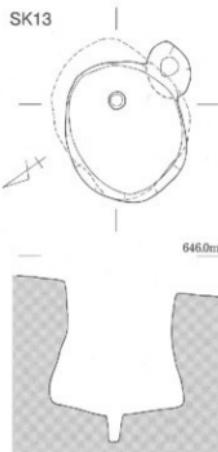
SK12



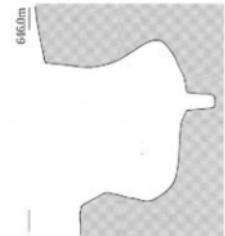
632.4m



SK13



646.0m



第8図 調査区南壁断面図

3. その他の遺構

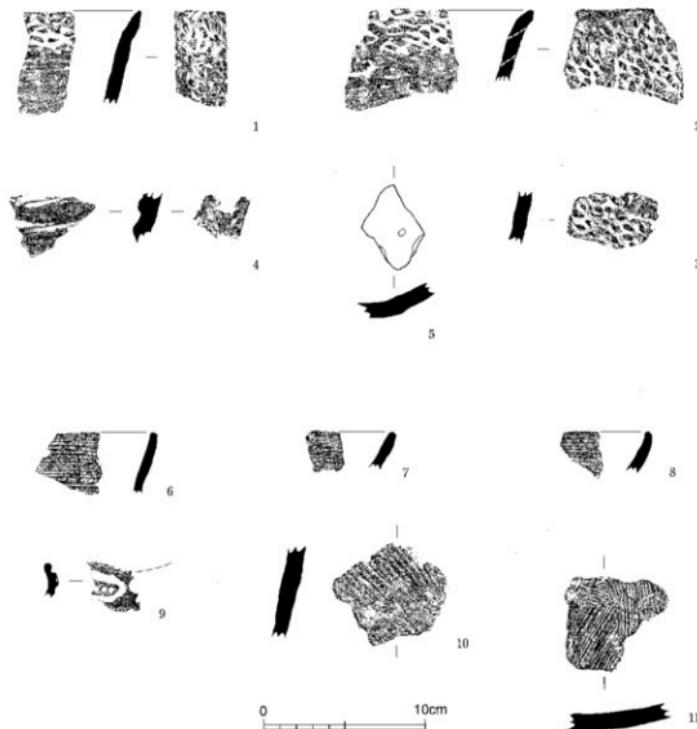
尾根上からSK11周辺の平坦部にかけてピットが疎らに分布する。合計34基検出したが、特に尾根の北側斜面とSK11周辺の平坦部にまとまりがみられる。前者は、南北方向に列状に延び、後者は、SK11を囲むように配列する。規模は径20~50cmの円または楕円形を呈し、深さはいずれも4~18cmと浅い。柱痕などは確認できなかった。

調査区内の斜面で、溝状の凹地を検出した。尾根北側斜面のものの底付近から縄文時代早期の土器片が出土した。

第3節 遺物

1. 土器

外野遺跡から出土した土器は、確認調査時出土分も含めても36点と少ない。これらはすべて破片であ



第9図 出土器

り、全容のわかる土器はない。実測はこのうち、11点について行った。土器の多くは、遺構の集中する尾根上から西向きの緩い斜面にかけて出土した。ただし、遺構から出土したものはない。

土器の年代は、大部分は縄文時代早期と中期の2時期に大別できるが、いずれもクロボクド層とその直下の茶褐色シルト上面から出土しており、明確な時期別の上下関係は認められない。

早期の土器（第9図 1～5）

いずれも押形文土器であり、黄島式、高山寺式併行のものである。(1)は口縁部が外反し、外面と口縁端部内面に押型楕円文施す。黄島式併行期と思われる。(2)と(3)は胎土や色調から同一個体の可能性がある。(1)同様、口縁部が外反し、外面と口縁端部内面に押型楕円文施す。(4)は高山寺式である。外面は押型楕円文施した後、ナデを行う。内面は断面形が半円状を呈する斜行辺線を施す。(5)は、押形文土器の底部付近と思われ、やや丸みをもつ。

中期の土器（第9図 6～10）

(6)～(8)は同一個体の口縁部である。外面は無文で、内面は条痕が認められる。(10)は深鉢の体部下半と思われ、斜め方向にL Rの縄文を施す。(9)は波状口縁の波底部付近である。口縁の下部に沈線で楕円形区画文を施し、区画内を刺突する。

時期不明の土器（第9図 11）

(11)は内面にハケまたは条痕を施す。破片のカーブから丸底上器の底部付近と思われる。胎土や焼成の状態も他の土器と異なることから、縄文土器でない可能性がある。ただし、土師器、弥生土器とする積極的根拠もないため、ここでは時期不明としておく。

2. 石器（第10・11図）

楔形石器（S1）

上下両方に微細な階段状剥離が連続しているのが観察され、楔形石器と判断した。長さ29.3mm、幅22.7mm、厚さ7.1mm、重さ3.1gである。正面右下の部分に下側からの加熱によってスパールが剥離した痕跡が認められる。石材は一見サスカイトに類似した粘板岩であり、外野波豆遺跡や外野柳遺跡で出土しているものと同類であろう。

使用痕のある剝片（S2）

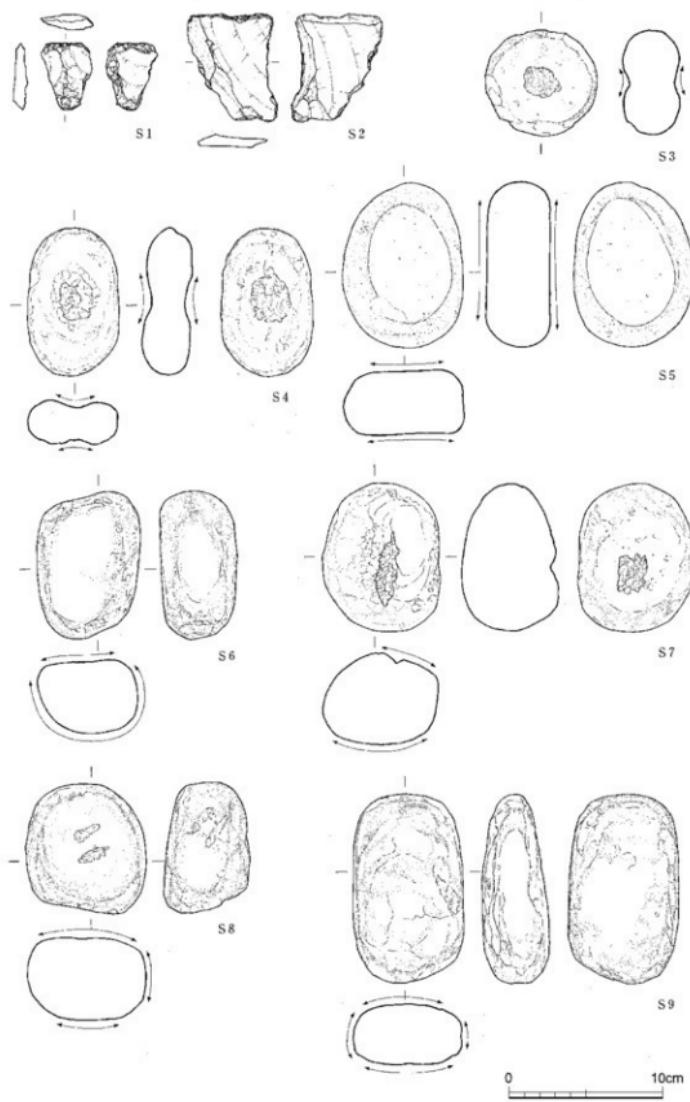
横長剥片を素材とし、正面上、右、左側の各縁辺に使用痕状の小さな剥離が認められる。長さ47.0mm、幅39.5mm、厚さ6.0mm、重さ8.9gである。石材は(S1)と同様である。

凹石（S3・S4）

2点出土し、いずれも両面に使用による凹みが顕著に認められる。(S3)は円形の自然礫を利用しており、側縁にも若干敲打の痕跡を残す。裏面側を除き全体が変色していることから被熱している可能性がある。長径71.5mm、短径68.0mm、厚さ36.5mm、重さ245.4gで、石材は角閃石を含む多孔質の安山岩である。(S4)は楕円形の自然礫を利用している。長径95.0mm、短径59.0mm、厚さ30.0mm、重さ222.4gで、石材は多孔質の凝灰岩であろう。

磨石（S5～S9）

8点出土したうち、磨面の比較的明瞭な5点を図化した。石材は8点すべて多孔質の凝灰岩が用いられている。(S5)は両面に使用による平坦面が顕著に認められ、両面ともに内湾気味である。長径106.5mm、短径77.5mm、厚さ40.5mm、重さ574.3gである。(S6)は正面側の平坦面が内湾気味で顕著であるが、裏

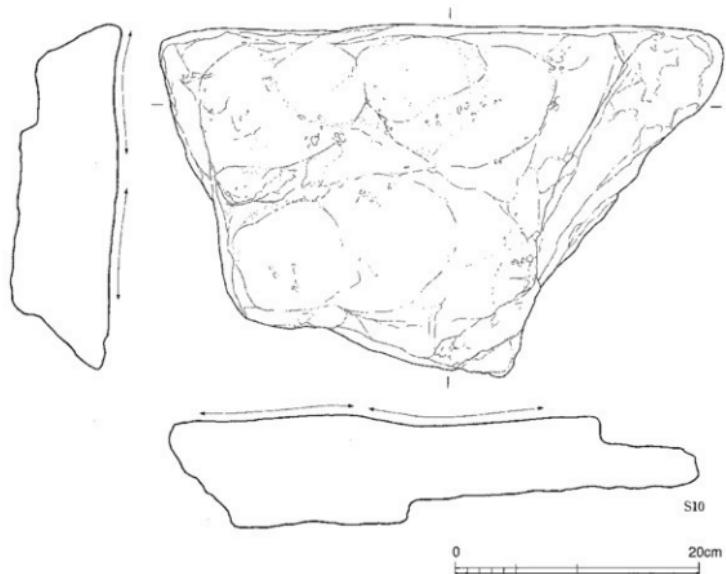


第10図 出土石器 (1)

側や側面にも使用が及んでいる状況が認められる。長径95.0mm、短径65.0mm、厚さ47.0mm、重さ468.0gである。(S7)は両面に敲打による凹みを持ち、正面右側に顯著な平坦面を持つほか裏側も磨面化している。長径95.0mm、短径76.0mm、厚さ62.0mm、重さ508.9gである。(S8)は正面側に加えて側縁も磨面化しており、やはり両面に敲打による凹みが認められる。長径8.4mm、短径7.7mm、厚さ5.4mm、重さ523.6gである。(S9)は裏面及び両側面が使用によって顯著な平坦面となり、正面側もやや磨耗している。長径122.5mm、短径70.0mm、厚さ39.0mm、重さ521.8gである。

石皿 (S10)

1つの平面に使用による3つの凹面が形成され、特に正面右上及び下側の面はよく磨耗している。多孔質の凝灰岩を用いており、長さ433.0mm、幅289.5mm、厚さ89.5mm、重さ14.1kgを測る。SK11の遺構検出面より、平面(第11図正面側)を上に向かた状態で出土した。



第11図 出土石器 (2)

第4章 まとめ

検出遺構について

遺構から遺物の出土ではなく、それぞれの遺構の所属時期は不明である。

S K12・13は、土坑底部に杭穴のある形状のものである。このように底部に杭穴をもつ土坑は、近隣する外野波豆遺跡でも多く検出されている。一般にこのような形状の土坑は、陥穴ととらえられることが多い。ただし、S K12・13は、断面形状が袋状を呈し、最も径が狭まった部分は径75cm以下であること。特にS K13の杭穴の位置が壁側に偏ることなどから陥穴とするにはやや疑問がある。袋状の形状から、貯蔵穴とも考えられ、この場合、杭穴には、支柱などが設けられていた可能性もある。

出土土器について

出土した土器は、縄文時代早期と中期末の2時期のものである。数量は少ないものの、それぞれの時期の出土量はほぼ同数である。同一個体と思われる破片もあるため、各時期とも復元しうる個体数は少ない。早期と中期末を連続させる遺物は認められず、出土層位的にも区別できない。本調査区を単独で見た場合、隔絶した2時期の小規模な遺跡と見える。しかし、外野柳遺跡など周囲の高原上の遺跡をみた場合、今回出土したものと重複する時期の土器が出土している。外野野遺跡は、鉢伏高原遺跡群も含めた高原上でさかんに行動したヒトの一痕跡とみるべきであろう。

出土石器について

外野野遺跡から出土した砾石器は、いずれも多孔質の凝灰岩やそれに類する石材が用いられ、調査区包含層に含まれる円礫と容易に区別できる。また、大きさや形状も掌に程よく取まる状態のもので、重量も円石が250g程度、磨石が500g程度と一定の傾向を示している。従って遺跡から離れた場所において、使用目的に応じてある程度選択的に石器素材が採取され、遺跡に持ち込まれた可能性が指摘できよう。

外野野遺跡について

調査区周辺の地形を観察すると、S K11周辺から南西に広くはないものの平坦面がある。磨石の多くはこの平坦面およびその周辺から集中して出土しており、ここが生活の場として用いられたと推定する。調査区の東から北側の地形は、斜面または谷であり、生活域とするには困難と思われる地形である。今回の調査区は生活域の一端を検出したに留まつたが、地形から判断して、生活域はさほどの広がりをもたないものと推定する。調査区北側の標高660m付近からは、かなりの広さを持つ緩斜面となる。この付近には、未検出ながらも、鉢伏高原遺跡のような広範囲におよぶ縄文遺跡を想定することができよう。そうした場合、今回調査した外野野遺跡は、東鉢伏高原に広がる遺跡群の1地区としてとらえることが適切であろう。

なお、高松龍暉氏が土器を採集した、従来の外野野遺跡とされる水田と今回の調査区とは、斜面などで隔てられており、直接連続しないと思われる。

報告書抄録

ふりがな	とののいせき							
書名	外野野遺跡							
副書名	一般農道整備事業(過疎基幹) 関宮西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	II							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第211冊							
編著者名	長濱誠司・上田健太郎・田中弘樹							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2001(平成13)年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
とのの 外野野遺跡	兵庫県 養父郡 関宮町 外野	28604 2000233	(確認調査) (全面調査)	35度 22分 28秒	134度 34分 03秒	1993.05.18 ~06.15 2000.10.02 ~11.10	13.5m ² 636m ²	一般農道 整備事業 (過疎基幹) 関宮 西部地区 に伴う調 査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な事項	特記事項	
外野野遺跡	集落跡	縄文時代		土坑等		縄文土器・石器	確認調査は、関宮 町教育委員会が実 施	

写 真 図 版



遺跡の遠景
(東から)
石奥が鉢伏高原



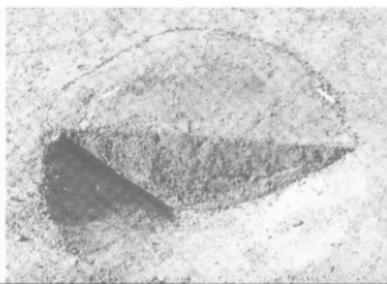
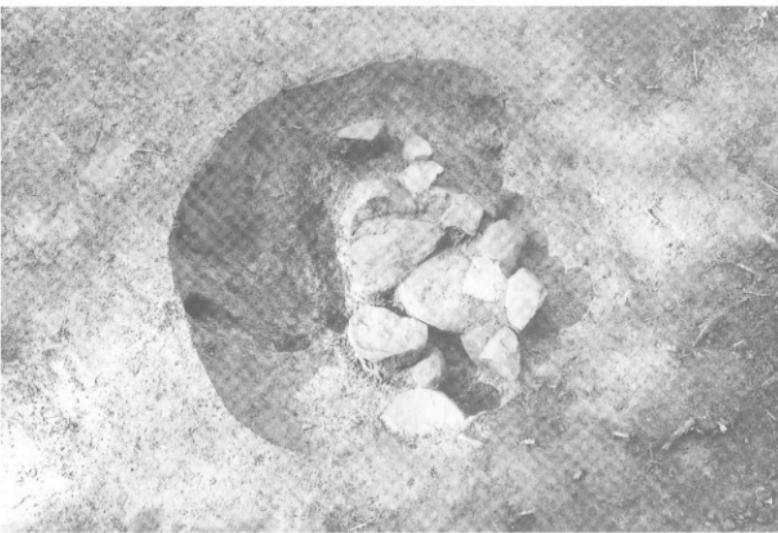
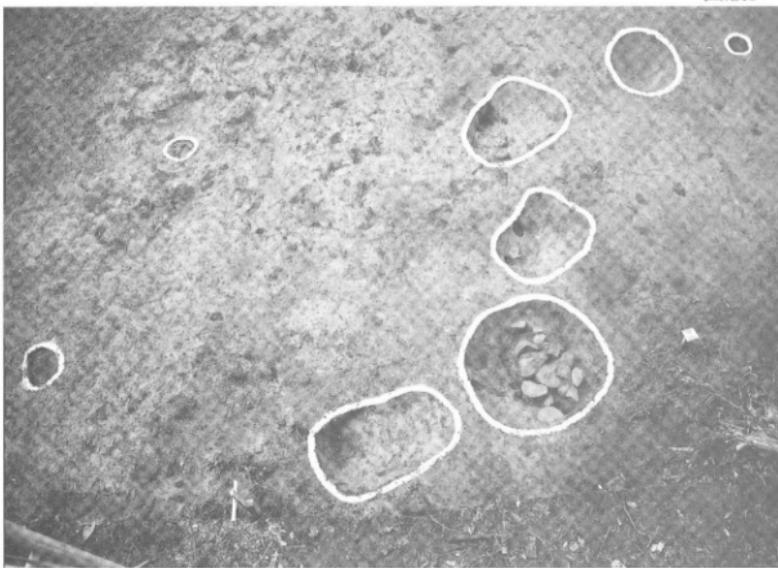
遺跡の遠景
(東から)

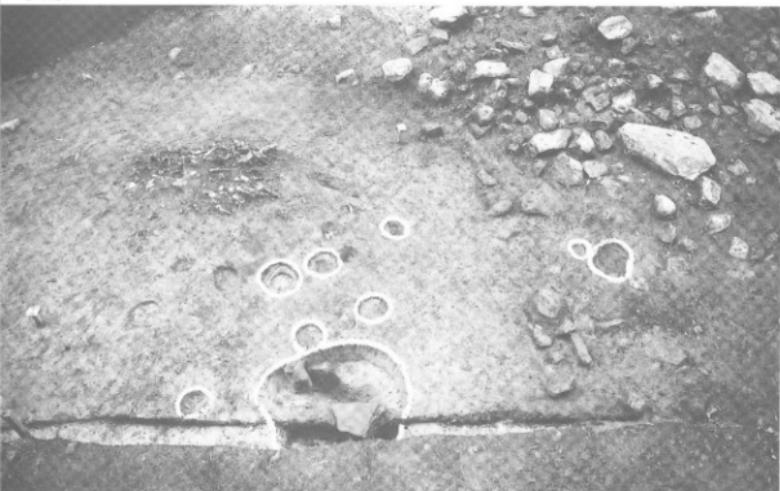


調査区全景
(東から)



調査区西半部
(西から)





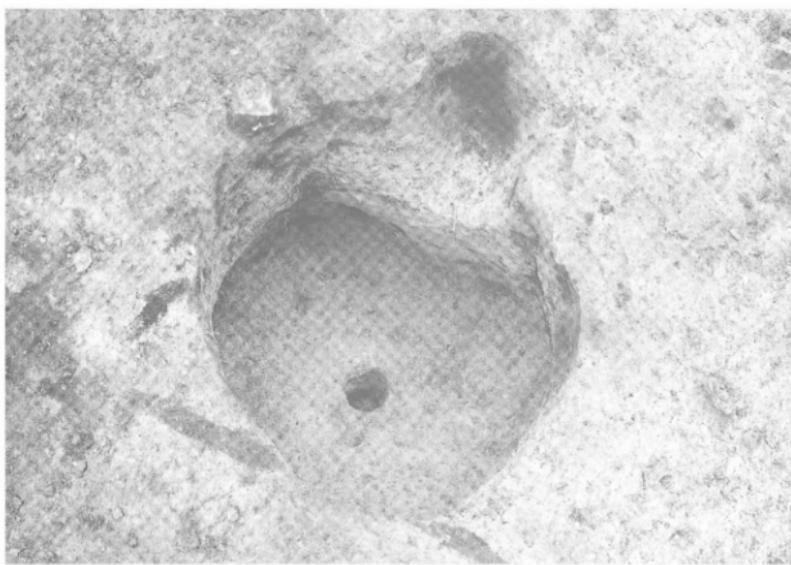
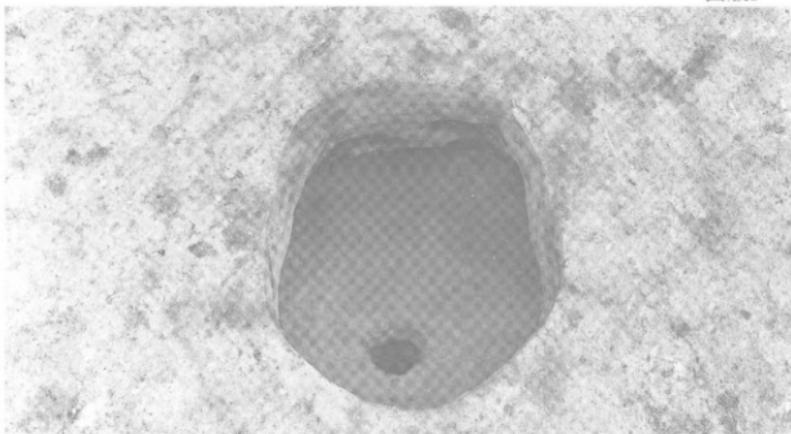
SK11周辺
(南から)



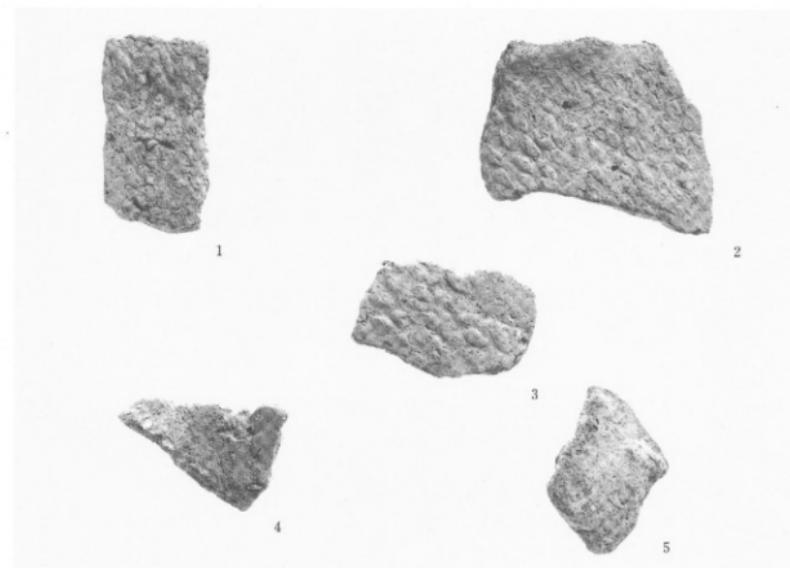
SK11
(南から)



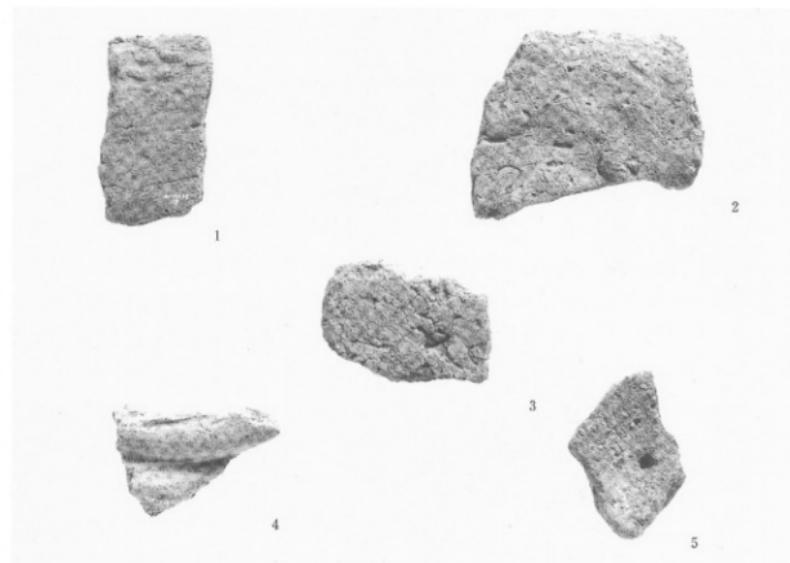
SK11
石皿出土状況
(南から)



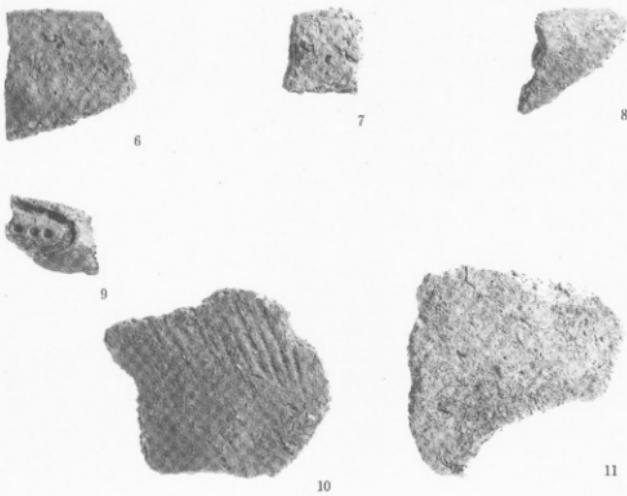
左：調査区東半部
南壁断面
右：調査区西半部
南壁断面



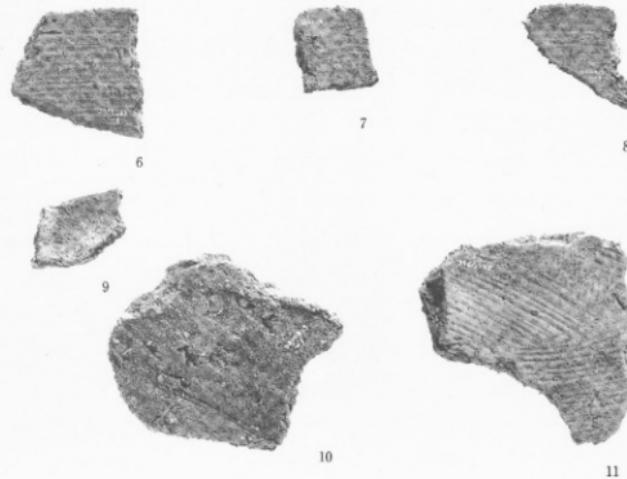
縄文時代早期の土器（表面）



縄文時代早期の土器（裏面）



縄文時代中期の土器（表面）



縄文時代中期の土器（裏面）



出土石器

兵庫県文化財調査報告 第211号

外野野遺跡

一般農道整備事業（過疎基幹）関宮西部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

平成13年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

T E L 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通丁目5丁目10番1号

印刷 株式会社 旭成社

〒651-0091 神戸市中央区若菜通5丁目1-16-280
